

# 高校生の中退意識に関する一考察

## —教育困難校での参与観察をとおして—

山藤忠生 (横浜国立大学大学院)

### 1. はじめに

平成 17 年度の文部科学省統計資料によると、高校進学率は 97.6% で、高校の生徒数は 3,605,242 人である。1974 年に高校進学率が 90% を越えて以来、高校教育は「準義務教育化」し、完全にユニバーサル化したといえる。

しかし、その一方で、高校中退者の増加が 1970 年代後半から問題視されるようになった。平成 17 年度の中退者数は 76,693 人であり、中退率は 2.1% である。少子化の影響もあり、1980 年代や 1990 年代のように、中退者数が 10 万人を越えていた時代に比べ、その数は減少傾向にある。だが、中退率は、全国統計を始めた 1978 年から 2% 前後で推移しており、慢性化しているといえる。わずか 2% のマイノリティである中退者に対する関心は低く、先行研究は少ない。

ところが、いわゆる「教育困難校」の場合は、中退率は 2% にとどまらず、中退者がマイノリティだとはいえないのが事実である。古賀 (2004) も、中退は逸脱のレッテルや負の社会的評価を課された特定の「課題集中校」、「教育困難校」に偏在してきたと指摘している。

そこで本研究では、中退者が集中する教育困難校を研究の実態を対象とし、参与観察を行った。頻繁に中退者が出る学校において、そこでの学校文化はどのようになっているのだろうか、生徒たちは学校を中退することをどのようにとらえているのだろうか。本研究はそうした問題意識に端を発している。筆者自身も高校中退を経験しており、それが研究の動機でもある。本研究は、教育困難校に入り込み、そこでの教育活動を観察することによって、ミクロな視点から高校中退について考察しようとするものである。

### 2. 先行研究

まず、中退研究の中から、研究者自身が中退者をどのようにとらえているか検討してみたい。

宮崎 (1996) は、高校中退者と高校非進学者を「学歴社会脱落者」としてとらえ、その実態と要因について、計量的方法を中心に分析を行っている。また、高校教育の意義についても述べているが、それは後の考察の部分でふれることにしたい。ここでは、中退者と非進学者は、学歴社会がもたらした学校病理の最も重症部分であるとしている。学歴社会の中で「低学歴マイノリティ」になることを覚悟し、そのスティグマを考えれば、非常なる決断をしたはずだと述べている。

一方、古賀 (2004) は、教育困難校での事例研究の中で、中退者は「学校制度の逸脱者」としてラベリングされやすいことを認めつつも、退学した生徒の中退認識は、前向きな選択として解釈されるとしている。それは、現在置かれた社会環境からの戦略的な選択であり、有意義な自己正当化であるともいえると指摘している。

では、次に、中退者の多い教育困難校の教育活動やそこでの指導の困難さに関する研究について検討してみたい。

古賀 (1992) は、教育困難校の教師たちは、生徒と「おりあいをつけている」と述べている。教師が授業に必ず遅れて行くことで、集りの悪い生徒たちから遅刻者を減らそうとする例などを挙げ、教育学的に価値のある行為とはいえないこうした戦略が、授業を成立させるには不可欠だとしている。だが、形骸化した授業に対して、教師自身が自負を失う結果を招いたことを疑問視している。

また、飯田 (1999) は、指導の困難さの背景

には、生徒としてのアイデンティティを持たない「生徒ならざる生徒」が増え、指導以前の指導が必要な生徒が増加していることを指摘している。指導が成り立たないことは、教師であることの基盤を揺り動かされることであり、指導の困難さの問題は、「教師のアイデンティティの揺らぎ」の問題に帰着すると述べている。

### 3. 研究の方法と結果

調査の対象としたのは、神奈川県にある A 高校である。A 高校は、公立の全日制普通科高校である。2007 年度卒業生のうち、中退者数は 93 人で、中退率は 39.7% である（入学者 234 人－卒業生 141 人）。また、例年、大学進学率が 10% に満たない進路多様校でもある。

調査者は、A 高校において、2007 年 4 月から 2008 年 3 月まで、非常勤講師として 3 年生の授業や学校活動を担当する過程で参与観察を行い、生徒と教師の日常的な様子をフィールドノートに記録した。記録した結果の概要をここで示しておきたい。

- ① A 高校における授業や教育活動は、学校に関与しない生徒と、独自のルールを作って守らせようとする教師によって営まれており、「指導すべき問題」によって生徒－教師関係が成立している。
- ② A 高校では、年度の途中でクラスメイトが退学することも多く、中退者と交友関係が継続している生徒も多いため、生徒が中退を意識することは少なく、学校からの脱落とはとらえていない。中退が身近な生徒の中退に対する意識は、プラスでもマイナスでもないという結果が得られた。

### 4. 考察

調査結果で明らかになったのは、中退者の多い高校では、古賀（1992）が指摘しているような、教育活動や授業を成立させるための、独自のルールが存在することである。一方、中退への意識に関しては、スティグマに苦しむ「悲観的中退者」や、負のレッテルと闘う「主体的中退者」といった、先行研究に挙げたような中退への意識は、この生徒たちの語りからは読み取れなかった。しかし、教育困難校においては、

一概に逸脱とは言い切れない「楽観的中退者」というような、もう一つの中退者のタイプが確認できたことを指摘しておきたい。

また、調査をとおして強く感じたことは、生徒や中退者側の意識ではなく、飯田（1999）のいう「教師としてのアイデンティティ」のあり方である。中退者を多数出しながらも、独自のルールで指導し、「高校生をさせる」こうした学校は、どれだけの教育的価値があるのだろうか。

たとえば、中退問題の政策事例として挙げられるエンカレッジスクールでは、たしかに中退率を低減させてはいる。しかし、並行して定時制・通信制高校の入学者が増加していることから、「中退しない」生徒を選別して入学させることで、従来の生徒層が押し出され、その進学先として定時制・通信制高校に流れ込みを起している可能性があり、中退に対する政策的意義に疑問が残る。

そして、宮崎（1996）が、高校の準義務教育化を今後も進めるのか、それとも、高校の教育内容の維持向上のために規制を強めるのかを考える必要があると指摘しているように、高校生の中退意識や教育困難校での教育活動は、高校教育自体を考える必要性を示しているといえる。

### <参考文献>

- 飯田浩之, 1999, 『指導困難』状況のなかの生徒と教師－アイデンティティ問題としての『指導の困難』『子ども問題』からみた学校世界』古賀正義編, 教育出版, pp.128-145
- 古賀正義, 1992, 「非進学校教師の教育行為」『高校教育の社会学』門脇厚司・陣内靖彦編, 東信堂, pp.149-168
- 古賀正義, 2004, 「学校化社会のなかの『中退問題』教育困難校の事例から」『学校のエスノグラフィー』古賀正義編著, 嵯峨野書院, pp.155-174
- 宮崎和夫, 1996, 『学校不適應の社会学的研究』創森出版
- 文部科学省, 2005, 『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』(2008.8.1)
- [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/12/07060501.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/12/07060501.htm)
- 東京都教育委員会, 2007, 『平成 19 年度公立学校統計調査報告書』(2008.8.1)
- <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/toukei/19sotsugo/toppage.htm>